



住みよい幸せな国づくり

NPO 法人
日本・デンマーク
生活研究所【会報】
第 33 号 (2020 年 4 月)
発行人 千葉 忠夫

民主主義への道 16

理事長 千葉忠夫

・25人乗りバスで1カ月の

ヨーロッパ旅行に出発

最初の1週間、生活訓練をしながら来たべき1カ月のヨーロッパ旅行の計画を皆で立てた。行きたい国、行きたい都市を挙げ、地図上で距離を測り、一日最大でも700~800km走行するとして、1カ月での訪問可能な国や都市を決めた。出発前には4人1組となり、1組に6人収容できるテントの設営、撤収の練習も何度かさせた。

25人乗りのバスを借り、運転手は私と、私の友人である佐々木さんが交代で、ナビゲーターは生徒たちが交代ですることにした。ナビゲーターはその日の目的地までしっかりと道路標識を見て運転手に知らせるよう指示した。もちろん佐々木さんと私は彼らに頼って運転したらとんでもない所に行ってしまうのは十分承知してのことである。

さて、この1カ月のトラブルスクールの旅行先はデンマークをスタートして戻るまで訪ねた国は順番にドイツ、オランダ、ルクセンブルク、フランス、モナコ、イタリア、バチカン、オーストリア、リヒテンシュタイン、スイス、再度ドイツ。通過あるいは休憩した都市は30以上になる。

25人乗りバスの後部座席にはキャンプ用器材(テント、スリーピングバック、炊事用具、食器、食料品など)を積み込み、前の座席には日本の生徒が女4人、男3人、デンマークの生徒が女1人、男4人で計12人、スタッフは穂積さん、佐々木さん、私の3人、それに当時小学校5年生であった佐々木さんの次女エミが乗った。

・「国連青年の年」を理由にバスの修理代は無料に —メンツ重んじたベンツの修理工場—

1985年7月5日ボーゲンセ出発の朝は快適であった。私たちの気持ちもかなりウキウキしていた。少なからず生活訓練が身に付いてきたので、この1カ月の旅行で、しっかりと日本の生徒たちに自信を付けさせられるという大きな期待に、私自身いたく燃えていた。確かこの年は「国連青年の年」だったはずである。

ボーゲンセを定刻の朝8時に出発、順調に南下し、ドイツの国境を無事通過、日本、デンマークの生徒たちもバスの中で仲良くしているし、至って問題のない旅行になると思っていた矢先、車の

調子がおかしくなってしまった。クラッチが切れなくなつて変速不能になってしまった。アウトバーンから出てのろのろと走行し、探し当てた最寄りのベンツの修理工場に入った。予約無しの来客に修理工は困った顔をしたが、こちらはもっと困った顔をし、旅行事情を説明し、すぐ修理してほしいと頼み込んだ。なかなか「ヤー」と言わない。そこで私は言ったものだ。「このバスはメルセデスベンツ会社製で信頼できる車だから使っている。なんとか頼む。」修理工は工場長のところへお伺いを立てに行つたらしい。しばらくするとカイゼルひげをはやした恰幅のいい紳士が出てきた。

「我々は国際青年年に協賛し、デンマークからヨーロッパをGOOD WILLするため一周する予定である。しかるにこの世界的に有名なメルセデスベンツが初日に故障してしまった。なんとか直ちに修理してもらえないだろうか？」とドイツ語はあまりできないので英語で丁重に訴えた。工場長はチラッとバスの中に乗っている不安顔の若者たちを見回してから「よろしい、直ちに修理するからあの若者たちを降ろしてくれ。」

すぐ修理にかかってくれた喜びと安堵感は私を落ち着かせてくれたが、修理代が心配になってきた。2時間半ばかりして工場長が出てきた。「OK、修理した。無事な旅行を祈るよ!」「えッ? それで、修理代はいかほどで...?」「いらん、ベンツが持つ! 任務を遂行してくれたまえ。」やはりベンツでなくてメンツがあったんだ。「フィーレンダンケ!!」を3回ほど繰り返して述べ、感謝の気持ちを胸一杯に修理工場を出て、アウトバーンに入りアムステルダムを目指した。

約200~250km走行したら休憩し、運転手とナビゲーターはそれぞれ交代することにした。走行中起きているのは運転している者くらいで、生徒たちは釣られて積み込まれたマグロの如く死んだように眠りこけていた。今まで見たこともない外国の景色を堪能したらよかろうに、と思うのだが、あまり興味はないようだった。

・テント張りも自分の分は自分で

アムステルダムのキャンプ場には予定より3時間遅れて午後9時過ぎに到着した。即座にテント設営を指示したものの、誰一人として作業にかからず、張ったのはスタッフたちだけであった。設営を指示した後は一切無視、もしテントを張らなければ彼らは寝るところがないのだから。ただ今夜は雨になりそうだとだけは何気なく伝えておいた。緯度が高い

とはいえアムステルダムでも7月の午後10時過ぎは薄暗く、ましてや雨模様であるからなおさらだ。

それまで売店などに散っていた生徒たちは、雨がパラツキだすと慌ててバスに戻り、テントをバスから降り設営を始めた。このときも手伝ってやればすぐ済み、テントもしっかり張れるのだが、ここで手を出すと生徒たちの自律を妨げることになる。雨に濡れながらあたふたしている生徒たちを見ながら、「この方法が一番なのだ。手を貸すことは容易だが、生徒たちを自律させるのは難しい。手を出さないで見ているのは心苦しいが、彼らを自律させるためだ。」と何度も自分に言い聞かせた。

騒ぎが収まったので自分のテントを出て見回りに行くと、慌てて張ったのではなはだ頼りない。これでは雨に濡れたらペしゃんこだと思って注意だけはしたものの手助けはしなかった。夜半に濡れたくなければ直ちに自分たちで張り直せばよいのだから。すべて自分が取った行動に自分で責任を取らせよう。現実の生活を通して彼らに自律心を身に付けさせようというのがこの旅の目的だからである。

・生徒たちは「自由行動」を主張

昨夜遅くキャンプ場入りしたので午前中は生徒たちをゆっくり休養させ、午後からアムステルダム市内見学。生徒たちは自由行動にしてくれと申し出たが、今までの彼らの言動を観察した上での評価としては、とてもじゃないが自由行動は認めがたい。

私としては彼らにできるだけ自由を与え、責任もしっかりと取ってもらいたいと思うのだが責任を果たすことが彼らには難しい。夜、自分たちは自由がもっと欲しいからもっと責任も果たす、これからは言うことも聞くから明日は自由にしてくれと申し出てきたがまだ早いと私は判断した。

案の定、翌日の出発時デンマークの生徒から文句が出た。日本の生徒が夜遅くまで騒いでいたので朝食準備が遅れたと。そのことについて日本の生徒としつこいほど「責任ある自由」とはどういうことなのかを話し合った。私が日本の生徒と話し合っているのを知っているデンマークの生徒たちも日本の生徒たちと渋々ながらよりを戻し始めた。日本の生徒とデンマークの生徒が一つの団体として行動する社会が出来上がり、そこでの問題解決のため話し合う社会の中に自ずと規律も生まれ始めてきたように思えた。

アムステルダムに一週間滞在したのち次の目的地はパリである。パリへ出発の前日私は生徒たちに言った。「明日このキャンプ場を午前10時に出発する。午前10時までに朝食を済ませ、身の回り

品、携行品などを整理し、テントを撤収してすべてバスに積みこんでおくように。」「……」「10時定刻に出発するので遅れた者は置いて行く。」

ところで生徒たちのパスポートは私が保管していた。パスポート無しでは国境を越えられないことは出発前に教えておいたのである。

パリへ出発する朝、生徒たちは時間厳守をクリアしたのである。私は内心ほくそ笑み、「みなは立派だ。全員時間を守った。感心している」と告げ、この調子ならこの旅はうまくいくと思ったものだ。

・「パリってどこの国」

ベルギーを通過し、フランスに入り、パリの標識が見えてきたので、寝込んでいる生徒たちに大声で知らせた。「パリまで約250キロ!」「パリってどこの国だっけ?」「知らねエ〜ヨ!」後ろの座席で話しているのを聞くと、この生徒たちは日本の学校で何も習っていなかったのかと愕然とする思いであった。パリまで800km近い距離を佐々木さんと200kmずつ交代でドライブした。

パリのキャンプ場の位置はあらかじめ地図上でマークしていったのだが、パリ市内に入ってしまってロストポジション。迷路に入ってしまったも同然。道を聞いても、「ジュヌセパ」(フランス語で「知らない」となかなか英語をしゃべるパリっ子にぶつからない。地図上でマークしておいたキャンプ場はパリの南郊外にあると覚えていたのもっぱら天文航測、夕方の太陽を右上にみながら南へ南へと走行した。町並みが切れ始め、郊外らしくなってきたところでバスを止め、キャンプ場を聞くとなんと指さして教えてくれたではないか。見事な天文航測と我ながら感心したものである。

夕食は遅くて作れないので近くにあったアラブ系のレストランでもものすごく辛いソーセージとフランスパンで済ませた。ぶつぶつ不満を言っている生徒たちに翌日の指示を与え解散した。

この晩、生徒たちはディスコに行ったとかで朝帰り、おまけにキャアキャアうるさくしたのでキャンプ場のほかの客からフランス語で大目玉をくらった。私は引率者としてただただ平身低頭お詫びをするのみ。もちろん私もフランス語でこっぴどく怒られたのである。

「この東洋人、ヤポネ、礼儀知らず! マナーをわきましろ! 真夜中だぞ! 出て行け!」

たぶんこんな事を言っておられたのであろう。しおれるくらい情けない思いをさせられてしまった。パリの最初の日だというのに、再び先が思いやられ始めた。

・4人の生徒パリで行方不明

翌日はパリ市内見学、午前中に郊外電車と地下鉄

を乗り換え、コンコルド広場で降りた。昼食は穂積さんが日本食を振る舞ってくれた。

昼食後シャンゼリゼ通りの入り口で、「ここが有名なシャンゼリゼ通りである。この先に見えるのが凱旋門だ。現在時間午後2時、今から3時間自由時間とするので午後5時凱旋門の真下に集合。」生徒たちはアッという間にシャンゼリゼに消えてしまった。

穂積さん、佐々木と私も銀ブラならぬ、シャンブラをしながら凱旋門に向かった。私たちは集合時間午後5時の30分前には到着し、生徒たちを待った。佐々木さんの娘エミとデンマークの生徒4人と日本の生徒4人は5時までに集まったが、残り4人の日本人の生徒は集まらなかった。最初の1時間は今来るか、今来るかと待ち心でいたが、1時間を過ぎると事故でも起こしたのではと心配になってきた。イライラしながら2時間待ったが、4人はついに姿を現さなかった。すると時間通り集まった生徒たちが早くキャンプ場に帰りたいと文句を言い出した。

「穂積さん、4人は2時間待っても来ないから帰りましょう。」

「大丈夫でしょうかね～、何かあったらどうします？」

穂積さんは『積木崩し』で有名になり、そのため日本の同じ悩みを持つ親御さんたちから相談を受け、連れてきた子供たちなのだ。その子供たちをパリで4人も見失ってしまったのである。心配のほどは痛いほど分かるが、どうしようもないのでキャンプ場に帰ることにした。

「彼らにはキャンプ場の住所や電話番号を持たせてありますから、何かあったら私が責任を取りますよ」

と答えながらも、どうしたらよいのか自分一人であれこれ考えを巡らしていたのである。まずはパリでの一週間の定住地に戻るべきだと私は判断し、郊外のキャンプ場に戻ったのだ。

キャンプ場で暗い不安な気持ちを抱えながら、時間を守った生徒たちと夕食を取った。夕食後、私は警察や救急隊の電話番号を調べた。午後2時に解散し、その10時間後の午前0時までに4人の日本の生徒たちと連絡が付かない場合に備えた。穂積さんと私は同じテントであれやこれやと気を紛らすため、たわいないことを話すのだが午後11時を過ぎるころは話は上の空で、パリのど真ん中においてきた？4人のことで2人とも頭の中がいっぱいだった。

この手記は月刊「権利闘争」（権利問題研究会発行）にて連載されたものです。転載の許可をいただきました関係者の方々に感謝いたします。

『勿忘草の咲く町で』読後に思うこと

茂木俊郎 2020. 3. 10

『神様のカルテ』などで著名な現役の医師である作家、夏川草介氏の近作で、地方における高齢者医療の現実、という惹句に気持ちが動き読んでみた。

“高齢の患者が多く、内科病棟は半ば高齢者の介護施設のような状態”の地方病院に勤務する研修医と看護師が、様々な問題に悩みながら成長していく物語だが、こんな場面がある。

(引用開始)

「あなた（研修医・桂）の言うことは正論です」
谷崎（病院内で死神というあだ名を付けられ嫌われている循環器内科の医師。現在、桂の指導医。）は……
(中略) ……ごく穏やかに口を開いた。

「けれども正論だけではうまくいかないことが世の中にはたくさんある。とくに医療の領域にはね。理想と正論ばかりが溢れて、誰も現実を見ようとしないうとしない」

「どういう意味でしょうか？」

「私が医者になったころはね、医者というものは、どんな患者にも全力を尽くすことが当たり前でした。人の命は地球より重い、そんなご立派なスローガン掲げて、誰もが、脇目も振らず疾走していたんです。でももうそういう時代ではないんですよ」

谷崎は微笑を浮かべたまま、ゆっくりと首を左右に振る。

「我々はもう、溢れかえった高齢者たちを支えきれなくなっている。人的にも経済的にもね。二十年前と同じことを続けていけば、医療という大樹は、やがて根腐れを起こして倒れてしまうでしょう。倒れた大樹の下敷きになるのは、今懸命に高齢者を支えている若者たちです。彼ら次の世代の医療を守るためにも、枝葉を切り捨てていかなければいけない時代だ」

想像もしなかった言葉に、桂は呆然として指導医に目を向けた。

(翌日、心不全のため二週間前に施設から入院してきた八十歳の認知症の女性の容体が急変する。病室では看護師たちが酸素吸入の量を増やすなど、懸命の看護を続けている。谷崎医師はそれ以上の治療の中止を指示する。桂は抗おうとする。)

「先生、本当にこのまま何も処置しないんですか？」

「しませんよ。これで終了です」

「終了って……」

「もともと施設に入っていた重度の認知症患者です。闇雲に治療をして仮に命を取り留めたとしても、また施設に戻されるだけでしょう。潮時です」

(連絡を受けた家族が駆け付けた2分後に、この女性は亡くなった。遺体を引き取った家族を見送った後でなお食い下がる桂に、谷崎は十年以上前のある経験を語り、“地獄の谷崎外来として、院内でも有名”外来の診察に向かう。それは山のように押しかけてくる患者に一人で対応し続ける、気の遠くなるような作業なのだ。)

……しかし、谷崎はまるで椅子に根が生えたかのように動かない。いつ見ても、まったく同じペースと穏やかな態度で患者に接し続けているのである。

診察はけして杜撰(ずさん)ではない。むしろすべての患者に、等分の診察と説明と投薬と安心とを可能な限り与え続けているように見える。

今日も夕方までそうして外来をまわしていくのであろう。

(後日、穏やかな人格者として職員の信頼を集めている三島内科部長が、桂に語る。)

「谷崎君のように旗幟(きし)を鮮明にしている医師はそうはいない。けれどもこういう田舎の小さな病院の多くの医師たちが、今の高齢者医療について少しずつ疑念を持ちつつある。増え続ける大量の高齢者たちにこれだけの医療体制を維持し続けることは、次の世代に巨大な負債を残すことになる。本当にそれで良いのかとね」(中略)

「人が生きるとはどういうことなのか。歩けることが大事なのか、寝たきりでも会話さえできれば満足なのか、会話もできなくても心臓さえ動いていれば良いのか。こういった問いに正解があるわけではない。しかし正解のないこの問題に、向き合うことはぜひとも必要だ。けれども今の社会は、死や病を日常から完全に切り離し、病院や施設に投げ込んで、考えることそのものを放棄している。谷崎君はある意味で、投げ捨てられてしまったその問題を、ひとりで正面から受け止めているのだよ」(引用終了)

ひとつ間違えると「やまゆり 園」の殺人犯の異常な差別思想と同一視されかねない、非常にセンシティブな問題を扱った部分である。高齢者の介護に当たっている家族や施設職員の方々からは

大きな反発を受けるかもしれない。

しかし「谷崎医師」が高齢の患者を嫌悪し差別しているのではないことは、彼が外来患者を診察する日常の様子から明らかだ。むしろ彼は親切で頼りがいのある医師であるように思われる。

彼の問題意識は、夏川草介の問題意識と考えて良いのであろう。限りある医療資源を、先の無い高齢者と、長い人生を有している若者のどちらに配分すべきなのか？ 正解は無いのかもしれない。しかし、この国の現状は真剣にその問題に向き合わなければならない所まで来ている、と。

しかし、と私は思う。限りある医療資源、という現状を改善すべきだという問題の立て方もあるのではないか。国の使途不明金や無駄遣いを無くすだけでも医療資源の増大に振り向ける資金は増えるだろう。国民生活の質を切り下げてまで大量のオスプレイを購入することもあるまい。とはいえ、そのためには主権者国民が声をあげ政府の意思を変えさせなければならないが。

デンマークでは、この問題は解決済みなのだろうか？ 考えるまでもないことなのだろうか？

2020年度総会

新型コロナウイルスの感染がどうなるか、予想も難しい状況ですが、2020年度の総会を以下の要領で開催します。

【期日】5月23日(土) 15:00~17:00

【会場】TKP 東京駅セントラルカンファレンスセンター
カンファレンスルーム12D

(東京都中央区八重洲1-8-16 新槇町ビル12F
東京駅 八重洲中央口 徒歩1分)

総会終了後、17:30から、出席会員の意見交流を目的に懇親会を開催します。

【食為鮮 東京店】ショクイセン トウキョウテン
東京都中央区八重洲2-11-7 一新ビル1F

参加費は4000円です。当日お支払いください。

会場までの地図は同封の別紙をご覧ください。

総会への出欠席、委任状、懇親会への参加申し込みは同封のハガキにご記入の上5月15日までにお送りください。

編集後記 ★新型コロナウイルスへの不安が世界を覆いつくしている。★狭いクルーズ船内に乗客・乗員3700人を閉じ込め感染を拡大させたのは正しかったのか？★それまで対策の陣頭に立たなかった首相、支持率が下がった途端全国一斉休校を独断したのは、誰の為か？★未だに感染検査体制が不十分だと言いながら民間検査機関を使おうとしない理由は？★マスク不足。一方にネットオークションで888万円稼いだ静岡県議、他方マスク3万枚と1万2500枚を売らずに柏原市に寄贈したマスク製造業者二人。人間性の違い、歴然。(茂木)

発行所

〒292-0801

千葉県木更津市請西4-6-9

Tel & FAX: 0438-36-3565

お問合せ Tel: 090-9827-9262

茂木(もてき)俊郎

NPO法人ホームページ

<http://www.djsli.com>

メールマガジンの申し込みはホームページからお願いします。